

ありのままの「自分」

小学校六年

ある女の子が「バトルアニメが好き！」と笑顔で話していた。私は「えっ？それは、男の子が観るものでしょ。」と思わず言葉が口をついて出た。

先日、人権についての授業があった。先生から学習内容が書かれた用紙が配布された。そこにいのあるセリフがあった。「男なら泣かずに元気出して。」一見、男の子をはげます一言に思える。しかし、「男なら泣かずに」ということは、「男は泣かない」と決めつけている。その時、ふとあの時の女の子との出来事を思い出した。

私は、「お母さんのお手伝いしてえらいなあ。さすが女の子やね。」とほめられたことがある。逆に、「女のくせに食事のマナーがなってない。」としかられたこともある。自分は女の子だからお手伝いをしたのではないし、女の子なのに食事のマナーが悪いのがいけないわけではない。男の子「でも」お手伝いをする人がいる。女の子「でも」行儀の悪い人もいる。

しかし、「でも」がついているところからまちがえていた。「女の子でも」や「男の子でも」ではなく、好きだから「好き」。自分がしたいと思うから「する」。自分の「好き」を他人が勝手に決める権利はない。強制された道に行く「つらさ」と自分で選択した道に行く「幸せ」は大きくちがう。

「バトルアニメは男」と言い放った自分。「男は泣かない」と決めつけた人。「女の子だから」とほめたりしかったりした人。その発言は本当に「正しかった」のだろうか。私は「女の子だから」と言われて悲しかった。逆に自分も「男の子が観るもの」と言い、相手を傷つけてしまった。

私には小説家になるという夢がある。「女の子らしい」「男の子らしい」ことが素晴らしいと言われたとしても、自分の意志にほこりを持って生きたい。胸を張ってさけぶ。いつか、すてきな小説家になるぞ！